佐久市埋蔵文化財調査報告書　第２８０ 集

西近津遺跡群

西近津遺跡ＸＶ

長野県佐久市長土呂 西近津遺跡ＸＶ発掘調査報告書

2021．３

佐久市教育委員会

例　言

1．本書は、株式会社一条工務店が行う宅地造成工事に伴う西近津遺跡群西近津遺跡ＸＶの発掘調査報告書である。
2．調 査 原 因 者　　株式会社　一条工務店　代表取締役　岩田直樹
3．調 査 主 体 者　　佐久市教育委員会
4．遺跡名及び調査面積　　西近津遺跡群　西近津遺跡ＸＶ（ＮＴＸＶ）　154 ㎡
5．所 在 地　　佐久市長土呂字三メ畑 1916-1
6．調 査 期 間　　令和２年７月 10 日～７月 29 日（現場発掘作業）
　　令和２年７月～令和３年３月（報告書作成作業）
7．調 査 担 当 者　　冨沢一明
8．本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

1．遺構の略記号は、住居址（H）・土坑（D）・掘立柱建物址（F）・溝（M）である。
2．挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。
3．遺構の標高は遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」とした。
4．土層の色調は、1988 年版『新版　標準土色帖』に基づいた。
5．挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。

地山　赤彩　須恵器
掘方　黒色処理・すり面・焼土

発掘調査状況

目　次

例言・凡例・目次
第Ⅰ章　発掘調査の経緯
　　１．経過と立地
　　２．調査体制
　　３．調査日誌
　　４．遺構・遺物の概要
　　５．標準土層
　　６．調査の方法
第Ⅱ章　遺構と遺物
　　１．竪穴住居址
　　２．掘立柱建物址
　　３．土坑
　　４．溝状遺構
第Ⅲ章　調査のまとめ

第１図　西近津遺跡ＸＶ位置図

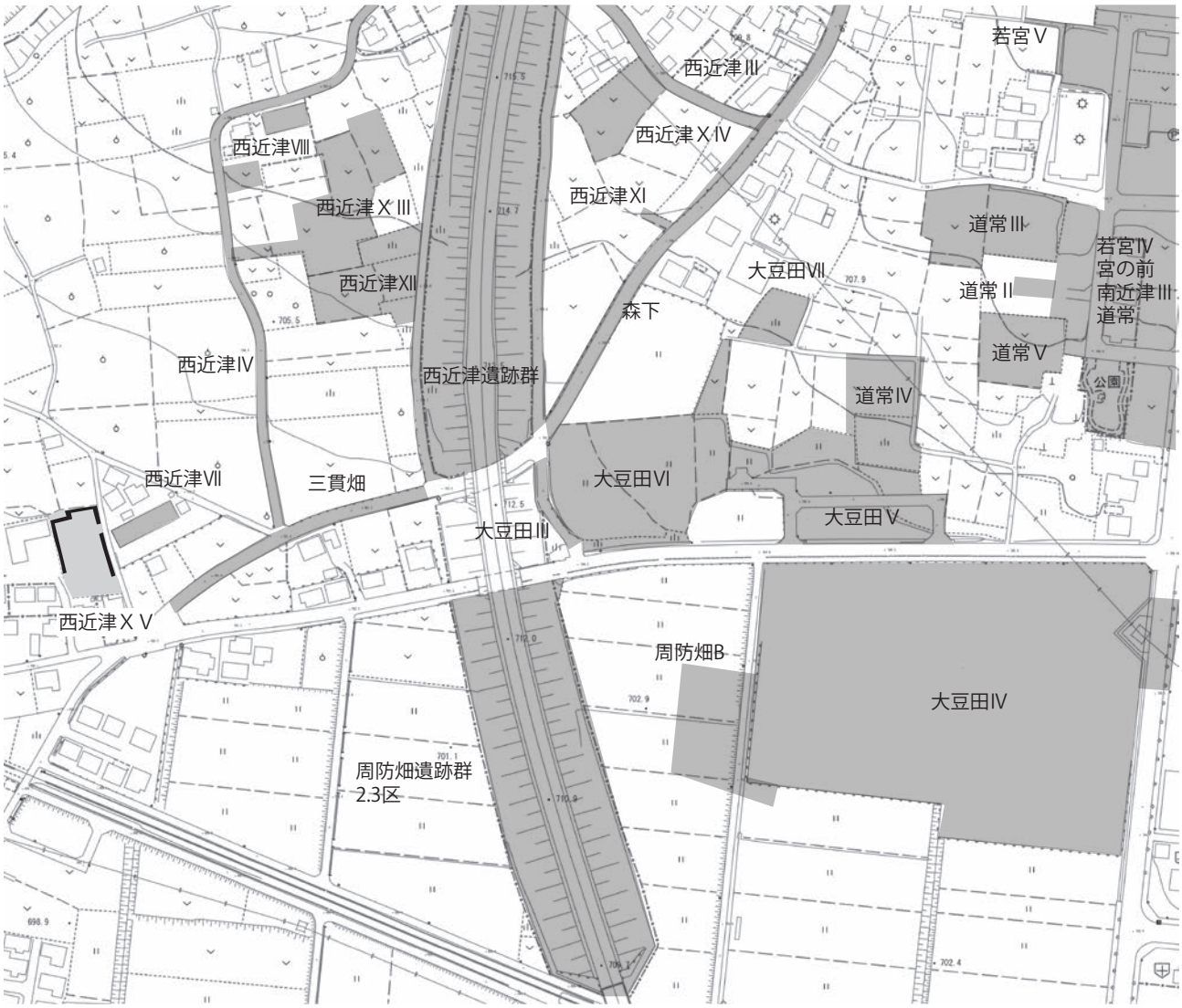
第Ⅰ章　発掘調査の経緯

１．経過と立地

西近津遺跡ＸＶは、佐久市長土呂に所在し、西近津遺跡群の南西よりに位置する。遺跡は、田切台地上の末端に立地し、台地周辺の海抜は 702 m前後を測る。

本遺跡の周辺は、新幹線駅開業や中部横断自動車道路開通、また区画整理事業等により多くの開発が行われ、先行して埋蔵文化財発掘調査が数多く行われている地域である。周辺の遺跡としては中部横断道路建設で行われた西近津遺跡群や周防畑遺跡群からは国内最大級となる弥生時代後期の竪穴住居跡や大型の翡翠製勾玉、平安時代の銅印等が出土している。また、東側の区画整理事業である宮の前遺跡や若宮遺跡からは、佐久地域で最大規模となる方形周溝墓群が検出され、その形態も四隅が切れるタイプをはじめ、円形周溝墓で四か所均等に溝が切れるタイプなど、今までの調査では確認されなかったタイプの周溝墓群が確認され注目を集めている。

今回、遺跡群内において株式会社一条工務店により宅地造成の計画がされ、市教育委員会に文化財保護法 93 条の届出があった。市教育委員会では試掘・確認調査を行った。その結果から遺跡の保護措置がとれない道路拡幅部分と擁壁設置部分で記録保存目的の発掘調査を行うこととなった。



第２図　周辺遺跡位置図

２．調査体制

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長　棚澤晴樹				
事　務　局	社会教育部長	三浦一浩				
	文化振興課長	東城　洋				
	企　画　幹	岡部政也				
	文化財調査係長	山本秀典				
	文化財調査係	小林眞寿	羽毛田卓也	冨沢一明	上原　学	久保浩一郎
	調　査　員	浅沼勝男	小林妙子	依田好行	中澤　登	大矢志慕
		橋詰勝子	橋詰信子	箕輪由紀	堺　益子	柳澤孝子
		松本仁宣	高野園美	清水律子		

３．調査日誌

令和２年　４月 21 日　株式会社一条工務店より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。

４月 23 日　長野県教育委員会へ市教育委員会より２佐教文振第 1056-2 号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について（副申）

４月 27 日　長野県教育委員会より２教文第７-157 号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）

５月 21 日　株式会社一条工務店より埋蔵文化財調査費概算見積依頼が提出。

７月　３日　株式会社一条工務店と市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結

７月 10 日～７月 29 日　記録保存目的による開発対象地の発掘調査を行い、引き続き報告書作成業務を行う。

令和３年　３月　調査報告書を刊行する。記録類･出土品を整理保管し､すべての業務を終了する。

４．遺構・遺物の概要

遺構	竪穴住居址	11 軒（弥生後期～奈良）	土　坑	５基
	掘立柱建物址	１棟	溝状遺構	４本
遺物	弥生土器（箱清水式）	土師器・須恵器（坏・甕）		

５．標準土層

今回の調査地点は南方向に僅かに傾斜する台地上で、基本層序は２層に分かれる。第Ⅰ層 (10YR4/1) 褐灰色土 耕作土　第Ⅱ層　(10YR5/6) 黄褐色土浅間Ｐ 1、Ⅱ層上面が遺構確認面である。しかし、後世のカクランが激しい部分も多く、Ⅰ層の耕作土が深く遺構を削平している部分もあった。

６．調査の方法

遺構調査・遺構測量

住居址は均等に４分割し、対面する２区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。

遺物は分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続する№を付け３次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って２分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は遺構№で一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遣り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は 1/20 を基本とした。

遺構・遺物の整理等

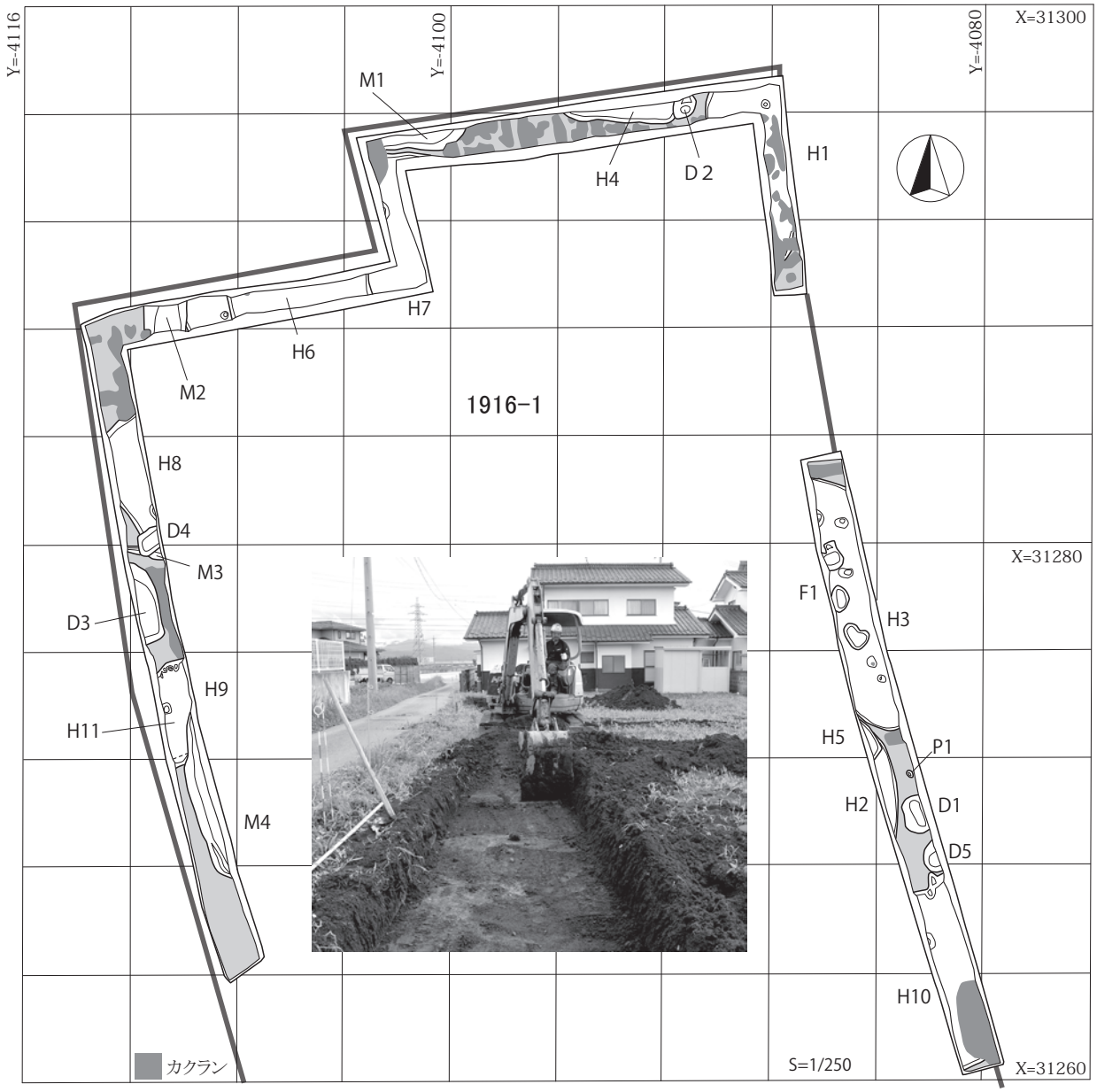
遺物洗浄は竹ブラシを用い手でおこない、室内乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより

行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物接合はセメダインＣを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。遺構図面は 1/20 で測量実測した図を 1/40 で修正し、遺物は 1/1 で実測し、それぞれ仮図版を作成した。

写真・報告書

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるＲＡＷ画質モードと、35 ㎜一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。

遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、ＥＰＳデータ形式で報告書に使用した。報告書挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真･拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「インデザイン」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。



第３図　西近津遺跡ＸＶ調査全体図

第Ⅱ章　遺構と遺物

１．竪穴住居址

(1) Ｈ１号住居址

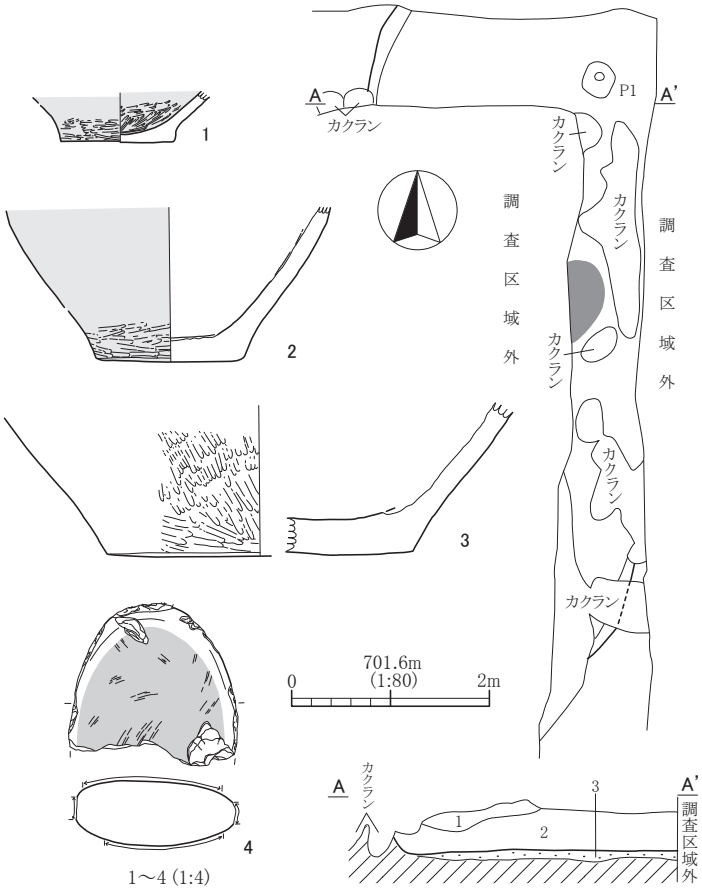
本址は調査地北東隅で検出された。形態は長方形と考えられる。カクランが多く西壁と南東コーナー付近が検出されたのみである。床はやや硬質であり、住居址中央から炉と考えられる焼土の広がりを検出した。ピットは１か所確認でき、径0.37m、深さ0.13mを測る。

出土遺物は４点を図示した。１は赤彩の鉢、２と３は壺の底部付近で、２は外面に赤彩が確認できる。４はすり石と考えられる。本址はこれらの出土遺物より、弥生時代後期の所産に位置づけられる。

(2) Ｈ２号住居址

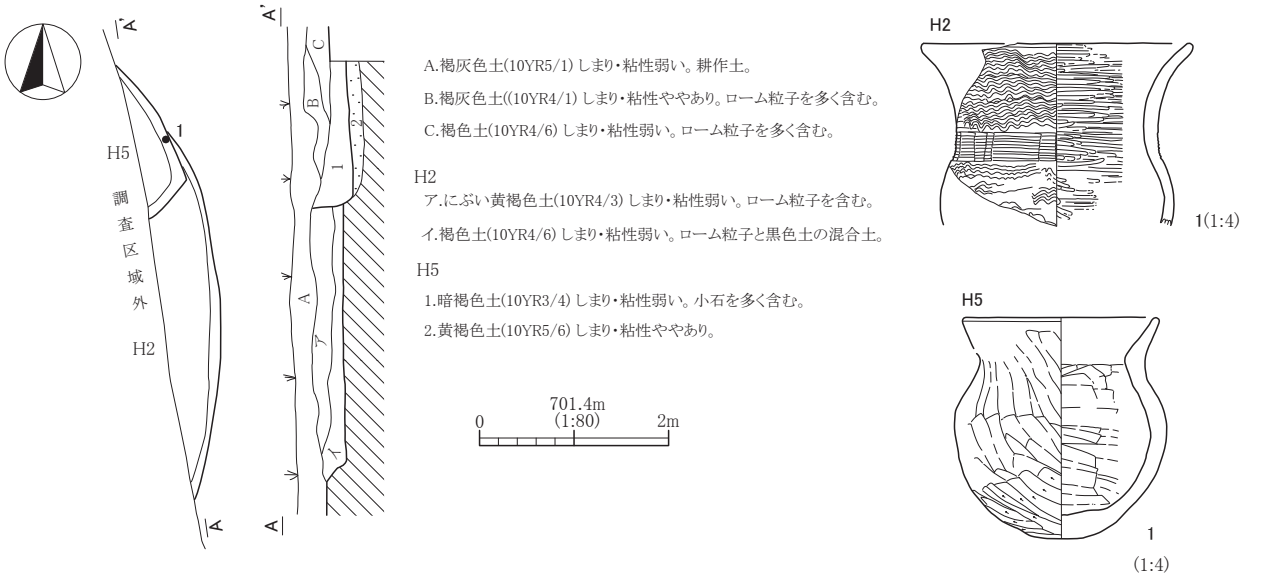
本址は調査地東側で検出された。H5号住居址に削平を受けている。形態は不明で、壁は緩やかに立ち上がり、高さ0.19～0.27m確認できた。床はやや硬質化していた。

覆土より図示した弥生甕が出土したことから、不確実ではあるが、住居は弥生時代後期の所産と考えられる。



1.暗褐色土(10YR3/3) しまり・粘性あり。黒色土ブロックを含む。
2.褐色土(10YR4/4) しまり・粘性ややあり。軽石を多く含む。
3.黄褐色土(10YR5/8) しまり・粘性弱い。黒色ブロックを多く含む。

第４図　Ｈ１号住居址及び出土遺物実測図



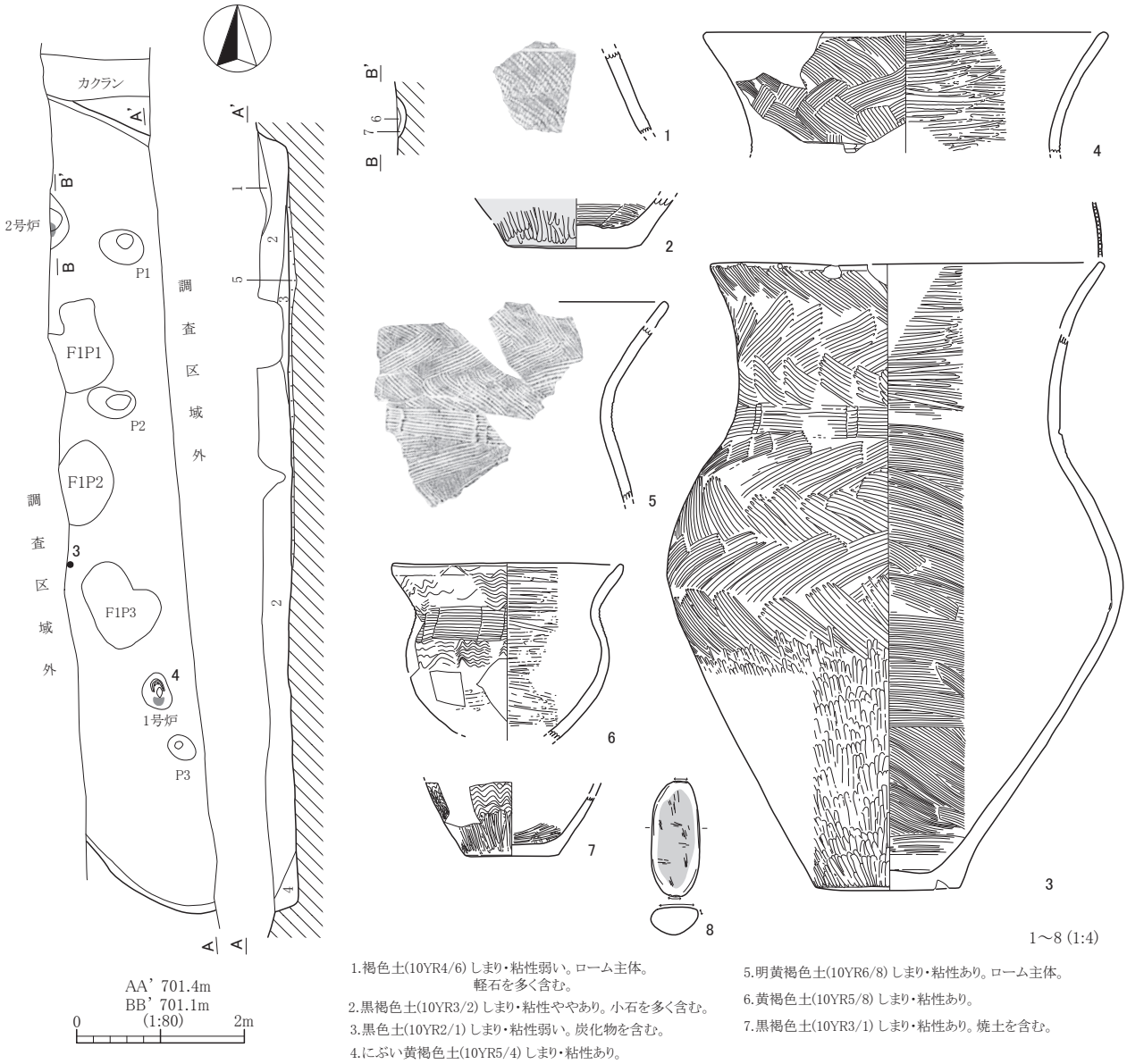
第５図　Ｈ２・Ｈ５号住居址及び出土遺物実測図

(3) Ｈ３号住居址

本址は調査地東よりで検出された。Ｆ１号掘立柱建物址に削平を受けており、北壁と南コーナー部の検出に留まった。検出状態より北西方向に長軸をもつ長方形の住居と考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、0.08～0.28mの高さを測る。床は硬質で、0.01～0.04mの薄い貼り床が確認できた。ピットは３か所確認でき、規模はＰ1が径0.54m・深さ0.46m、Ｐ２が径0.58m・深さ0.19m、Ｐ３が径0.35m・深さ0.35mを測る。炉は２か所確認された。いずれもわずかな焼土が確認できた。南側の炉はいわゆる「土器敷炉」で、図示した４の甕が使用されていた。深さは北側が0.14m、南側が0.06mを測る。

本址からの出土遺物は、覆土から多く出土し８点図示した。１は縄文施文の壺頸部破片である。３から７は甕であり、櫛描簾状文、櫛描波状文、櫛描斜走文等がそれぞれ施文されている。なお、６は台付き甕の可能性がある。８はすり石で一面がよく磨れている。

これらの出土遺物から、本址は弥生時代後期の箱清水期の所産と考えられる。



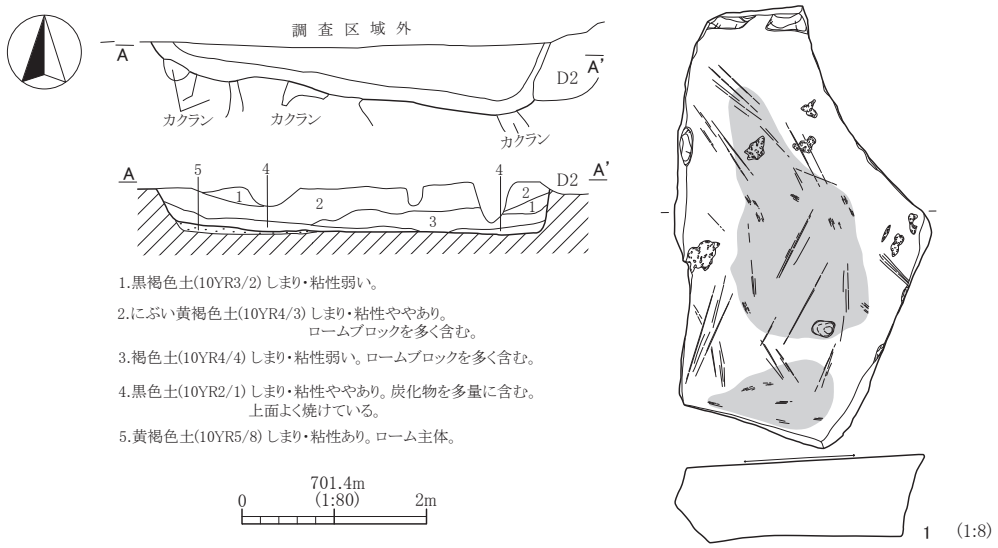
1.褐色土(10YR4/6) しまり・粘性弱い。ローム主体。軽石を多く含む。
2.黒褐色土(10YR3/2) しまり・粘性ややあり。小石を多く含む。
3.黒色土(10YR2/1) しまり・粘性弱い。炭化物を含む。
4.にぶい黄褐色土(10YR5/4) しまり・粘性あり。
5.明黄褐色土(10YR6/8) しまり・粘性あり。ローム主体。
6.黄褐色土(10YR5/8) しまり・粘性あり。
7.黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性あり。焼土を含む。

第６図　Ｈ３号住居址及び出土遺物実測図

(4) Ｈ４号住居址

本址は調査地北よりで検出された。南壁の検出に留まったが、住居東西長は 3.91m と確認できた。壁はほぼ垂直に立ち上がり、0.37 ～ 0.47m の高さを測る。床は硬質で、0.01 ～ 0.02m の薄い貼り床が確認できた。本址は床面上多くの焼土と炭化物が確認でき、焼失住居の可能性がある。

本址からの出土遺物は、弥生後期の箱清水式土器が出土したがいずれも小片で図示できなかった。図示した１の石は床面上から出土し、礫中央はよく磨かれており、条痕状のこすったような擦りも確認できた。本址はこれらの状況から弥生時代後期の所産と考えられる。



第７図　Ｈ４号住居址及び出土遺物実測図

(5) Ｈ５号住居址

本址は調査地東よりで検出された。住居の南東コーナー部の検出に留まった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さ 0.19 ～ 0.39m を測る。床は 0.10 ～ 0.16m の厚みで貼られていたが軟質であった。

本址からの出土遺物は少なく、図示した小型甕が壁ぎわより出土したのみである。本址の所産時期は弥生時代後期のＨ２号住居址を削平する事と図示した土師器が出土した事により、古墳時代以降と考えられる。

(6) Ｈ６号住居址

本址は調査地北よりで検出された。住居の中央部の検出に留まり、東西長 5.06m は確認できた。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは遺構確認面より 0.70m を測る。床は軟質であった。

本址からの出土遺物は少なかったが２点を図示した。１は床面上に置かれた状態で出土した。壺の口縁部から頸部であり、赤彩はなかった。２は甕で覆土中から出土した破片が接合した。頸部に櫛描簾状文、口縁部から胴部に櫛描波状文が施されている。

本址はこれらの出土遺物から弥生時代後期の箱清水期に位置づけられると考える。

(7) Ｈ７号住居址

本址は調査地北よりで検出された。住居の中央をＨ６号住居址に削平されている。東壁と北壁の一部が検出されたが、東西方向に長軸をもつ住居と考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さ 0.07 ～ 0.22m を測る。床は軟質であった。

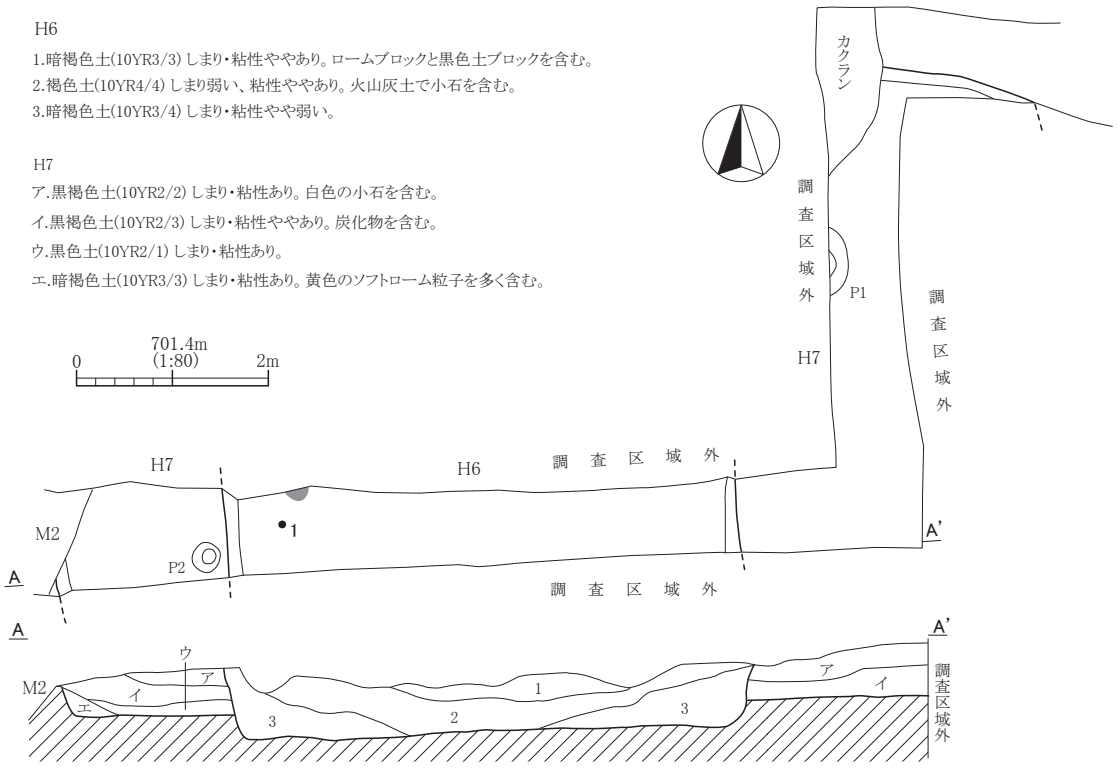
本址からの出土遺物は少なく、２点を図示した。１は文様施文が施されない無文の甕であり希少である。本址の所産時期は弥生時代後期のＨ６号住居址に削平されている事と図示した土器から、弥生時代後期の所産と考えられる。

H6

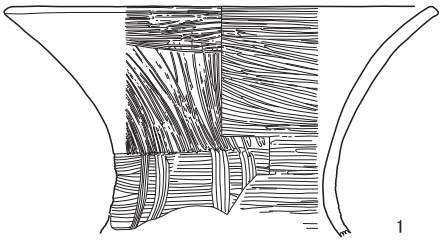
1.暗褐色土(10YR3/3) しまり・粘性ややあり。ロームブロックと黒色土ブロックを含む。
2.褐色土(10YR4/4) しまり弱い、粘性ややあり。火山灰土で小石を含む。
3.暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性やや弱い。

H7

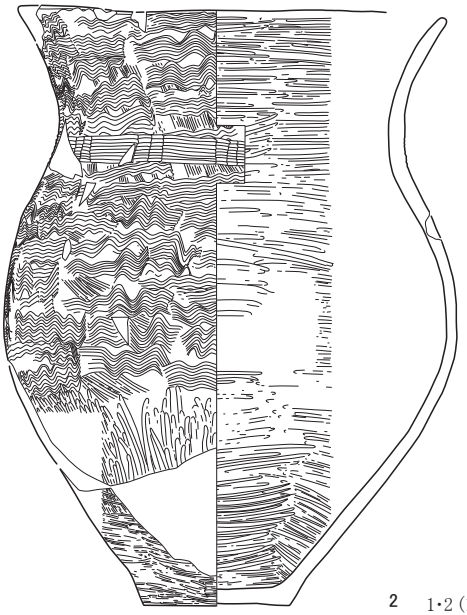
ア.黒褐色土(10YR2/2) しまり・粘性あり。白色の小石を含む。
イ.黒褐色土(10YR2/3) しまり・粘性ややあり。炭化物を含む。
ウ.黒色土(10YR2/1) しまり・粘性あり。
エ.暗褐色土(10YR3/3) しまり・粘性あり。黄色のソフトローム粒子を多く含む。



H6

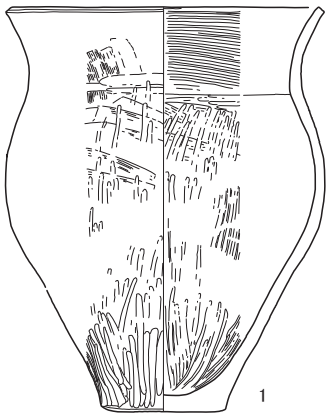


1

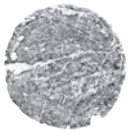


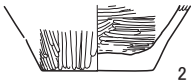
2 1・2 (1:4)

H7



1





2

1・2 (1:4)

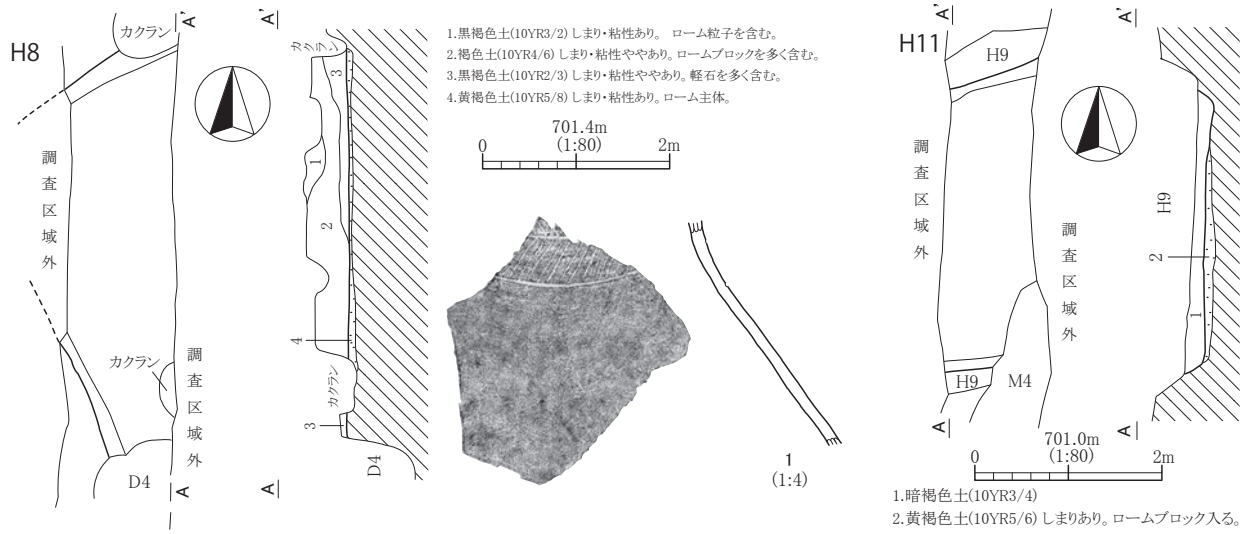
第８図　Ｈ６・Ｈ７号住居址及び出土遺物実測図

(8) Ｈ８号住居址

本址は調査地西よりで検出された。北壁と西壁の一部のみ検出された。壁はほぼ垂直に立ち上がり、0.14 ～ 0.27m の高さを測る。床はやや硬質で、0.02 ～ 0.07m の薄い貼り床が確認できた。

本址から出土遺物は弥生後期の箱清水式土器が出土したがいずれも小片である。図示した１の土器は弥生後期箱清水期の壺肩部の破片と考えられる。赤彩が施され、箆描沈線文が施されている。

本址は出土遺物から、不確実であるが弥生時代後期の所産と考えられる。

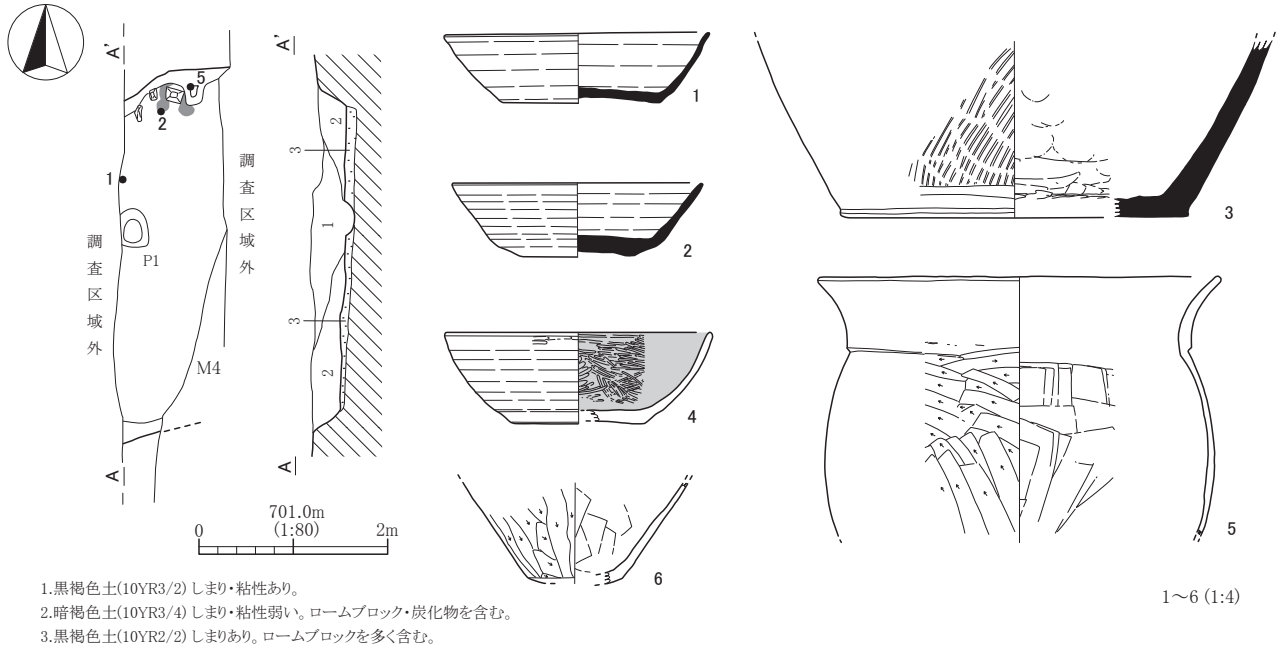


第９図　Ｈ８・H11 号住居址及び出土遺物実測図

(9) Ｈ９号住居址

本址は調査地西よりで検出された。北壁と南壁の一部のみ検出された。壁はほぼ垂直に立ち上がり、0.15 ～ 0.22m の高さを測る。床はやや硬質で、0.06 ～ 0.11m の薄い貼り床が確認できた。北壁にカマドが確認された。粘土と礫により構築されていたと考えられるが、原形を留めていなかった。

本址から出土遺物は６点を図示した。１と２は須恵器坏。４は土師器坏で黒色処理が施されている。３は須恵器甕の底部付近であり、５と６はいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる土師器甕である。



第 10 図　Ｈ９号住居址及び出土遺物実測図

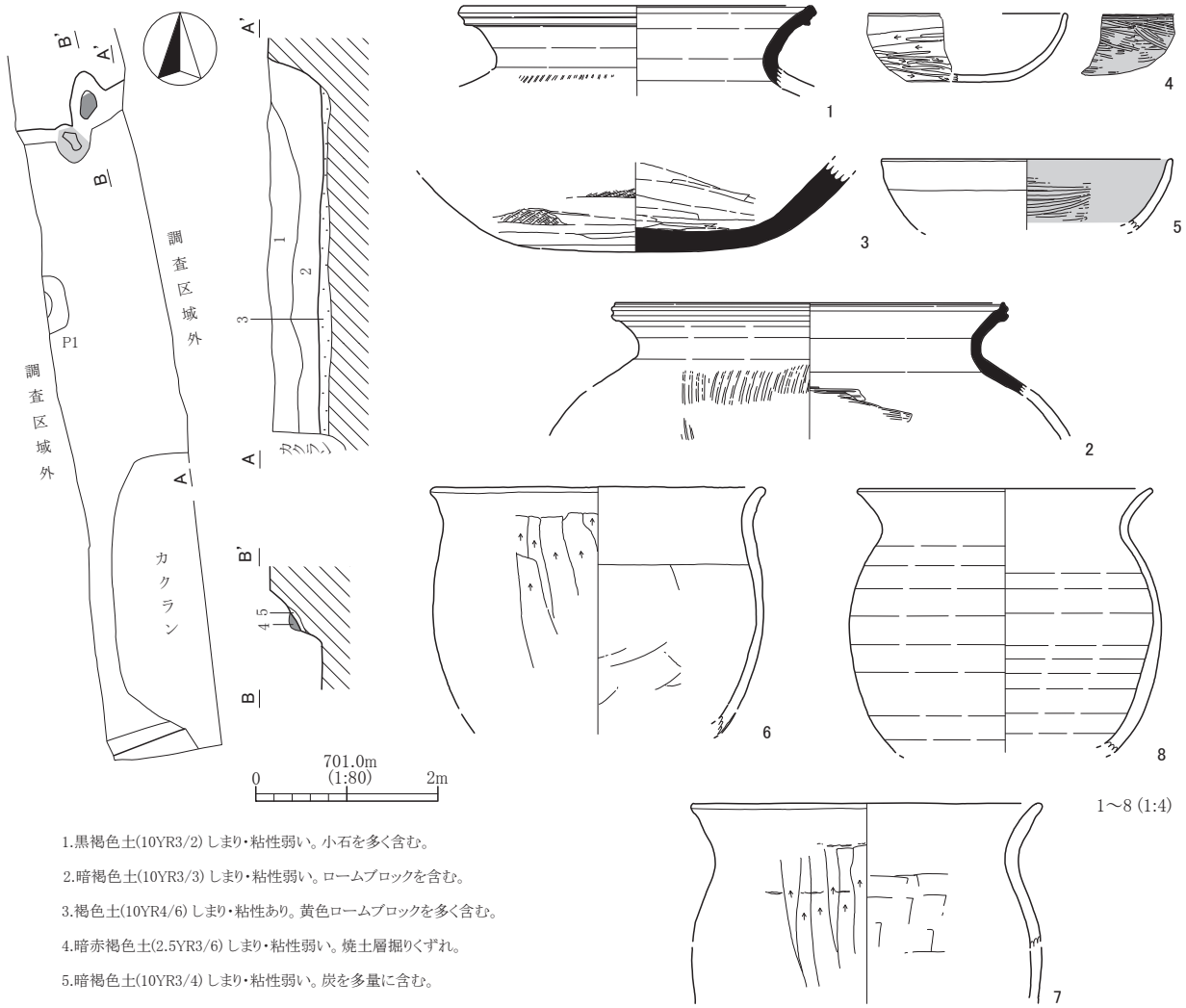
本址はこれらの出土遺物から８世紀後半代の所産時期が考えられる。

(10) Ｈ 10 号住居址

本址は調査地東よりで検出された。北壁と南壁の一部のみ検出されたが、南北長は 6.54m と確認できた。壁はほぼ垂直に立ち上がり、0.20 ～ 0.58m の高さを測る。床は硬質で、0.04 ～ 0.16m の貼り床が確認できた。カマドは北壁に確認された。粘土により袖部を構築していたと考えられるが、原形を留めていなかった。

本址からの出土遺物は８点を図示した。１から３は須恵器甕である。いずれも外面に平行タタキが観察できる。４と５は土師器坏でいずれも内面黒色処理が施されている。６から８は土師器の小型甕で８はロクロ成形がなされている。

本址はこれらの出土遺物から８世紀後半代の所産時期が考えられる。



第 11 図　H10 号住居址及び出土遺物実測図

(11) Ｈ 11 号住居址

本址は調査地西よりで検出された。北壁と南壁の一部のみ検出され、Ｈ９号住居址が被る様に重複する。南北長は 2.98m と確認できた。壁はゆるやかに立ち上がり、0.09 ～ 0.22m の高さを測る。床は硬質で、約 0.15m の貼り床が確認できた。

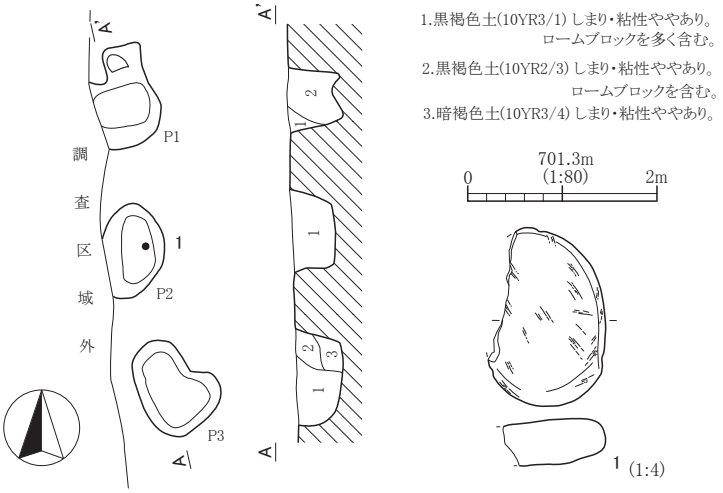
本址からは須恵器坏・甕片、弥生土器片が出土したが、所産時期は不明である。

２．掘立柱建物址

(1) Ｆ１号掘立柱建物址

本址は調査区東よりで検出された。南北方向の柱列のみ検出であったが、規模等から掘立柱建物址と判断した。柱軸方位はＮ－10°－Ｗを示す。各ピットの規模は、Ｐ１が径1.07ｍ・深さ0.57ｍ、Ｐ２が径0.99ｍ・深さ0.45ｍ、Ｐ３が径1.05ｍ・深さ0.49ｍを測る。P1～P3間は3.02ｍを測る。

本址からの出土遺物は図示した遺物の他に、P1から須恵器甕片、P2とP3が須恵器甕・坏片が出土した。いずれも小片であり図示できなかった。図示した１は軽石の石製品で側面に面取りが確認できる。本址はこれらの出土遺物から不確実ではあるが古代と考えたい。



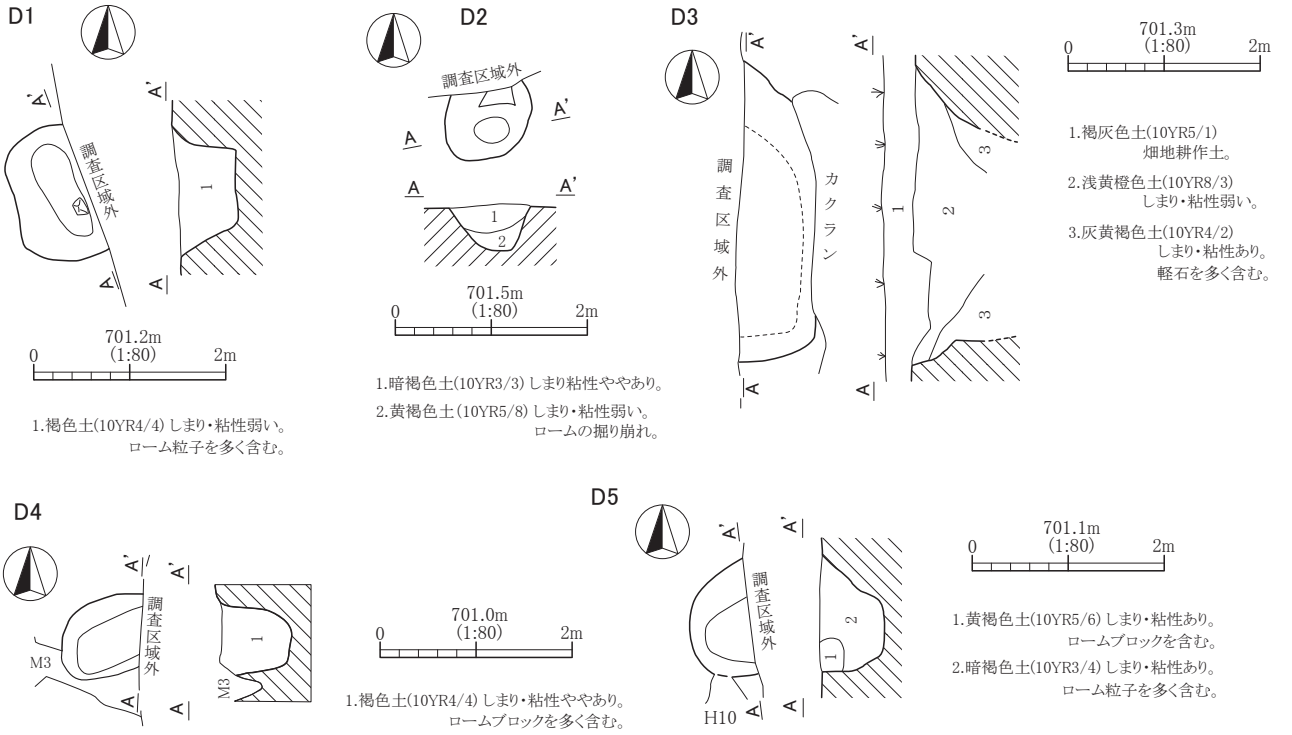
第12図　F1号掘立柱建物址及び出土遺物実測図

３．土　坑

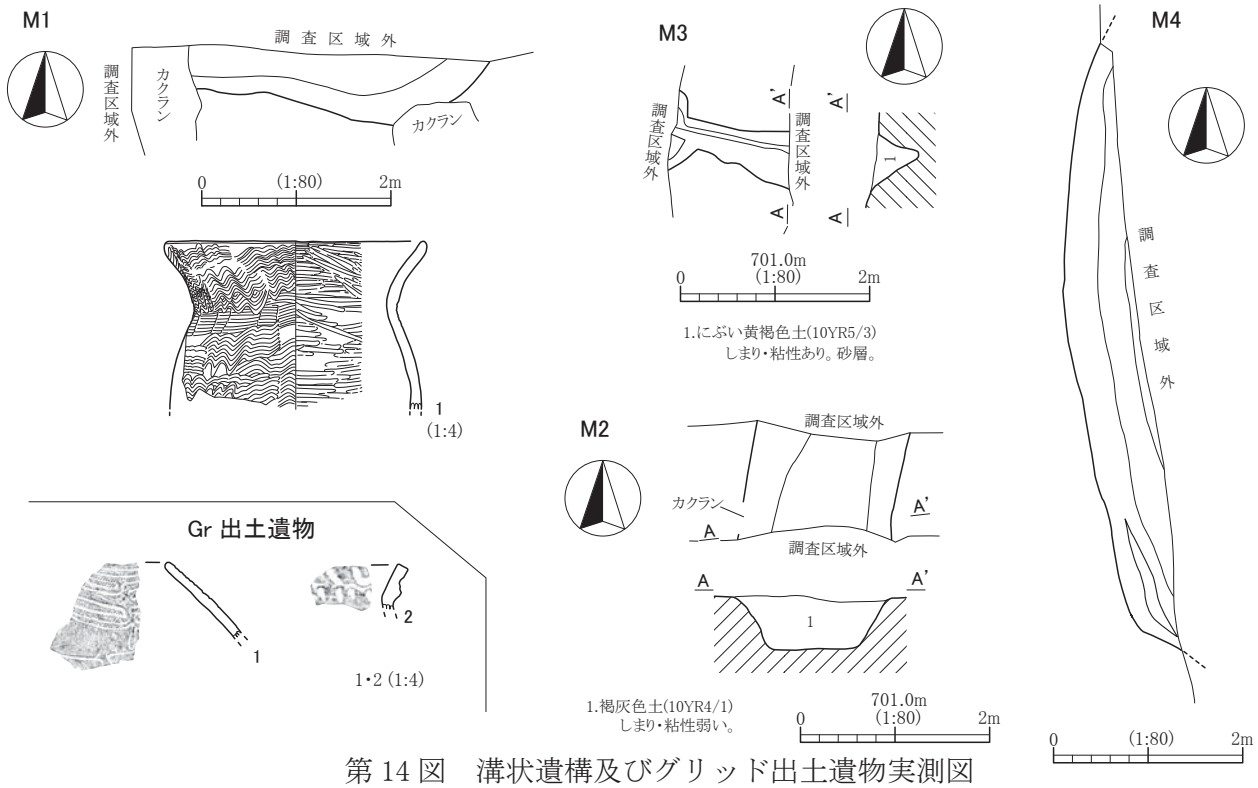
Ｄ１号土坑は調査区東よりで検出された。形態は楕円形である。規模は長軸1.45m、深さ0.63mを測る。本址からの出土遺物は須恵器坏・甕、土師器甕、弥生土器があったがいずれも小片であった。

Ｄ２号土坑は調査区北よりから検出された。形態は不整形である。規模は長軸0.84m、深さ0.53mを測る。本址からの出土遺物は須恵器坏・甕、弥生土器があったがいずれも小片であった。

Ｄ３号土坑は調査区西よりから検出された。形態は楕円形である。規模は長軸3.10mで、深さは湧水により完掘できなかった。状況より井戸址と考えられる。本址からの出土遺物は須恵器蓋・坏・甕、灰釉陶器瓶、弥生土器があったがいずれも小片であった。



第13図　Ｄ１～Ｄ５号土坑実測図



第 14 図　溝状遺構及びグリッド出土遺物実測図

Ｄ４号土坑は調査区西よりから検出された。形態は方形か。規模は短軸 0.78m、深さ 0.72m を測る。本址からの出土遺物は無かった。

Ｄ５号土坑は調査区東よりから検出された。形態は円形である。規模は長軸 1.21m、深さ 0.66m を測る。本址からの出土遺物は須恵器坏、土師器甕、弥生土器があったがいずれも小片であった。

４．溝状遺構

Ｍ１号溝状遺構は調査区北よりから検出された。東西方向に延びると考えられ、壁は緩やかに立ち上がる。本址からの出土遺物は図示した他に須恵器坏片があった。

Ｍ２号溝状遺構は調査区北よりから検出された。南北方向に延びると考えられる。規模は幅 1.59m、深さ 0.58m を測る。本址からの出土遺物は須恵器坏・甕、土師器坏があったがいずれも小片であった。

Ｍ３号溝状遺構は調査区西よりから検出された。東西方向に延びると考えられる。規模は幅 0.31 ～ 0.81m、深さ 0.42m を測る。本址からの出土遺物は須恵器坏、土師器甕、弥生土器があったがいずれも小片であった。

Ｍ４号溝状遺構は調査区西よりから検出された。南北方向に延びると考えられる。M2 号溝状遺構とつながるとも考えられる。規模は深さ 0.49 ～ 0.52m を測る。本址からの出土遺物は須恵器坏・蓋・甕、弥生土器があったがいずれも小片であった。

第Ⅲ章　調査のまとめ

今回の発掘調査は面積 154 ㎡、幅２ｍという限られた範囲の調査であったが、周辺地域の調査を補う形で調査成果があった。それらを列記して調査のまとめとしたい。まず、今回の調査地点まで東より弥生後期集落が広がるのが確認できた事である。中部横断道調査や東に接するⅦ地点でも住居址が検出されていることから台地縁辺に沿う形で集落が広がることが予想できた。このことから西近津の弥生後期集落は規模が非常に大きいことが推測できるようになった。また、群馬地域との関連が指摘される縄文施文の壺片出土も資料の追加となった。以上雑駁であるが調査のまとめとしたい。

図版１

左上
Ｈ１号住居址

左下
Ｈ３号住居址

右上
Ｈ２号住居址

右中
Ｈ４号住居址

右下
Ｈ５号住居址

図版２

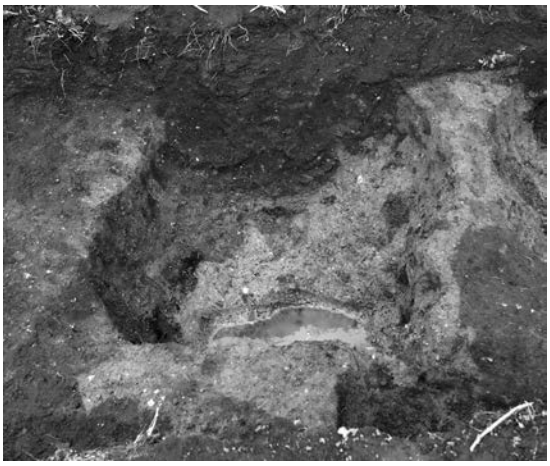
左上　Ｈ６．７号住居址　　右上　Ｈ８号住居址

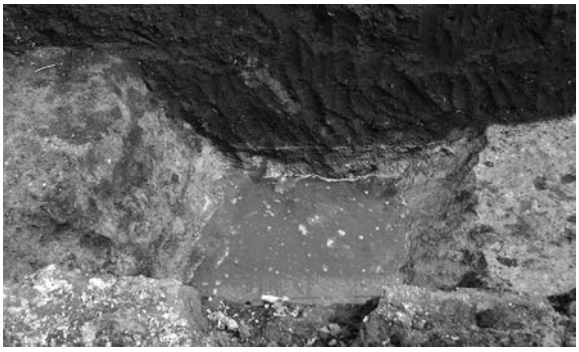
右中　Ｈ９号住居址

下　Ｆ１号掘立柱建物址

図版３

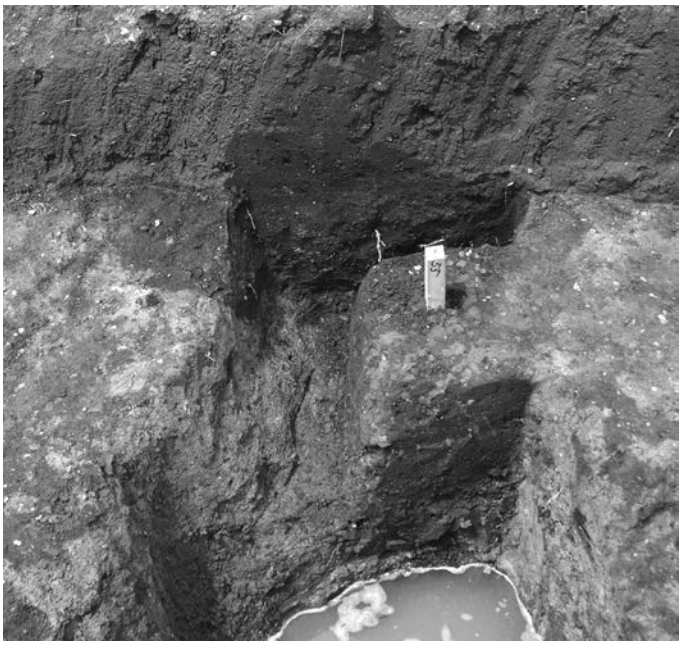
上　H11 号住居址
右上　Ｄ２号土坑
右中　Ｍ２号溝
右下　Ｄ４号土坑
左上　Ｄ１号土坑
左中　Ｄ３号土坑
左下　Ｄ５号土坑





H10 号住居址

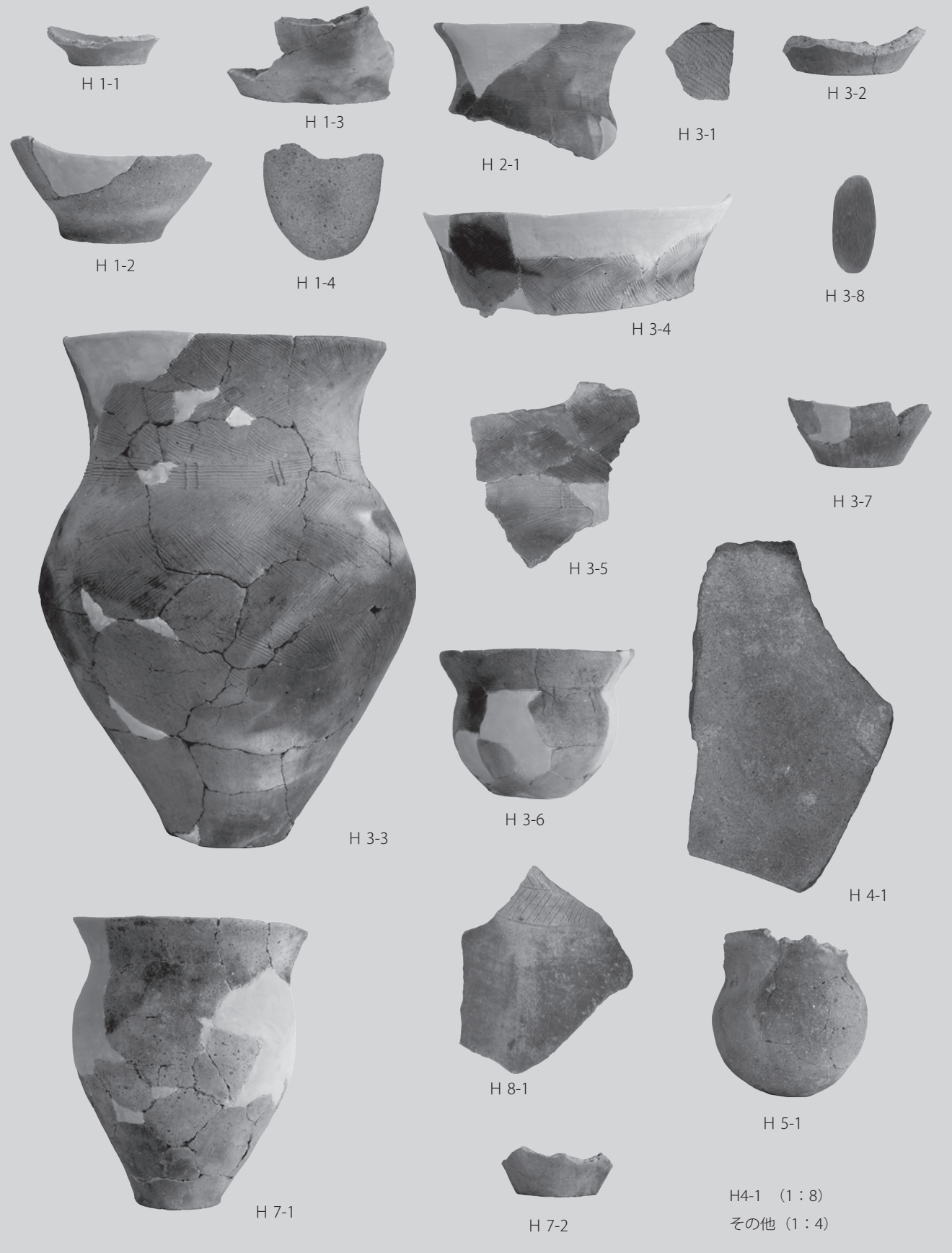
Ｍ ４号溝状遺構



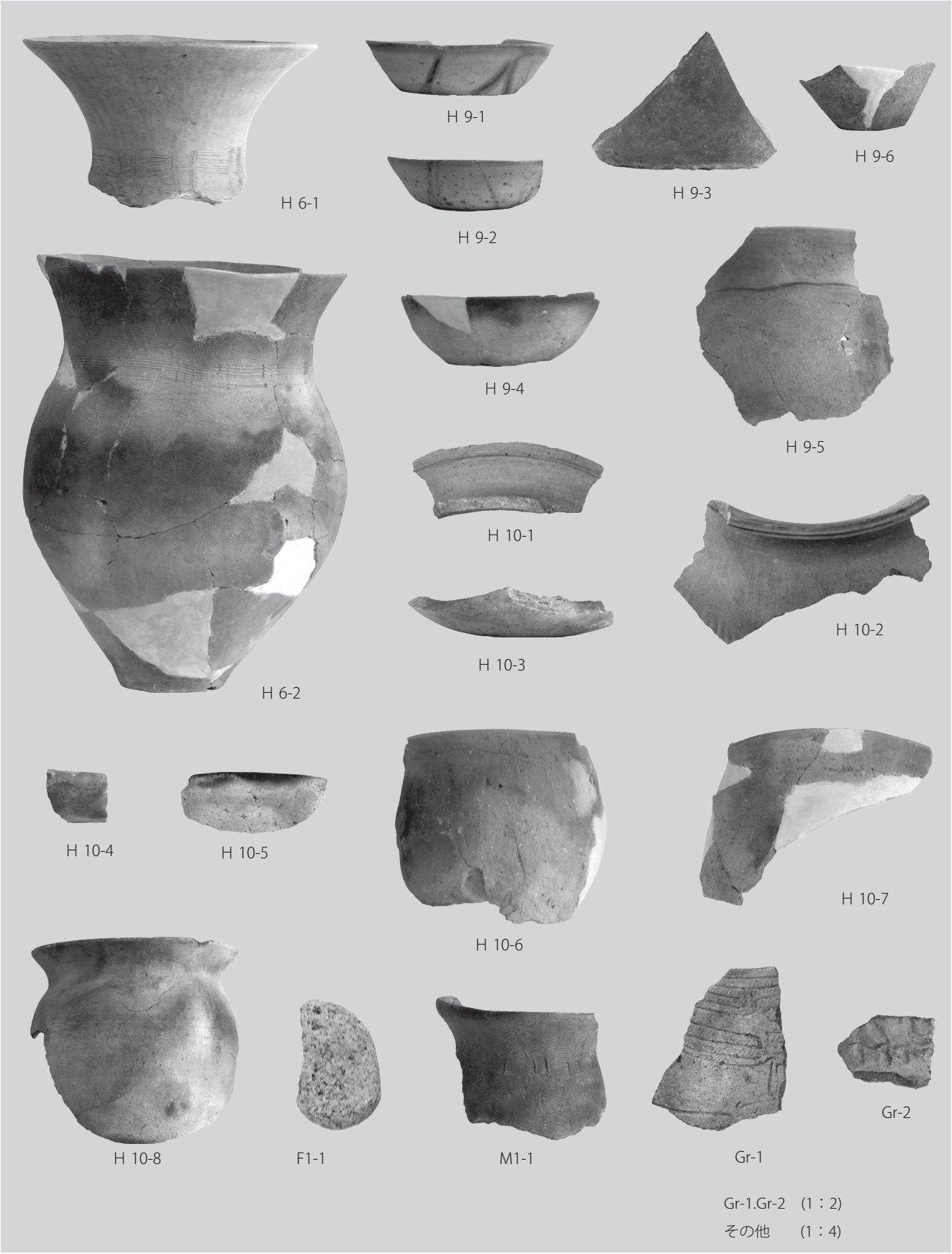
Ｍ ３号溝状遺構

Ｍ １号溝状遺構

図版 5


H 1-1
H 1-3
H 2-1
H 3-1
H 3-2
H 1-2
H 1-4
H 3-4
H 3-8
H 3-7
H 3-5
H 3-3
H 3-6
H 4-1
H 8-1
H 5-1
H 7-1
H 7-2
H4-1 （1：8）
その他（1：4）

図版 6


H 6-1
H 9-1
H 9-2
H 9-3
H 9-6
H 6-2
H 9-4
H 9-5
H 10-1
H 10-2
H 10-3
H 10-4
H 10-5
H 10-6
H 10-7
H 10-8
F1-1
M1-1
Gr-1
Gr-2
Gr-1.Gr-2 (1：2)
その他 (1：4)

報告書抄録

ふりがな	にしちかついせきぐん　にしちかついせきじゅうご
書　名	西近津遺跡群　西近津遺跡ＸＶ
副書名	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第280集
編著者名	冨沢　一明
編集機関	佐久市教育委員会　社会教育部　文化振興課
所 在 地	長野県佐久市中込2913　TEL0267-63-5321　FAX0267-63-5322
発行年月日	2021年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
にしちかついせきぐん にしちかついせき じゅうご 西近津遺跡群 西近津遺跡ＸＶ	さくしながとろ 佐久市長土呂 1916-1	20217	29	36°16.55	138°27.16	20200710 ～ 20200729	154	宅地造成 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西近津遺跡群 西近津遺跡ＸＶ	集落址	弥生 古代	住居址　11軒 掘立柱建物址　1棟 溝状遺構　4本 土　坑　5基	弥生土器 須恵器 土師器 石製品	

要　約	周辺の調査事例と同様に弥生時代後期から古代と考えられる竪穴住居址が検出された。

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第280集
西近津遺跡群　西近津遺跡ＸＶ
2021年　3月
編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501　長野県佐久市中込3056
社会教育部　文化振興課　文化財事務所
〒385-0051　長野県佐久市中込2913
TEL0267-63-5321
印刷所　キクハライン有限会社